

since 2011・3・11

特定非営利活動法人 レスキューストックヤード

東日本大震災

被災者支援活動報告



to the future with KIZUNA





特定非営利活動法人レスキューストックヤード 東日本大震災被災者支援活動報告

もくじ

代表理事、常務理事あいさつ	3
七ヶ浜町概要	4
活動年表	5
七ヶ浜での支援	6-8
名古屋からの支援	9-10
ネットワーク、協力団体	11-14

復興への道のりの途上で

発刊にあたってー代表理事・栗田暢之



このたびの東日本大震災で犠牲となられた方々にお悔やみを申し上げます。また、被災された方々に心よりお見舞いを申し上げます。

当法人は、あの日以来、宮城県七ヶ浜町での「ボランティアきずな館」を拠点とする支援活動をはじめ、東日本大震災支援全国ネットワーク（JCN）、震災がつなぐ全国ネットワーク×日本財団ROADプロジェクト、災害ボランティア活動支援プロジェクト会議、あいち・なごや東日本大震災ボランティア支援連絡会、愛知県被災者支援センター、東日本大震災被災者支援ボランティアセンターなごやなど、数多くの支援活動に積極的に参画して参りました。

当然ながらスタッフはフル稼働で持てる全力

を尽くしてきたつもりでしたが、ぶち当たる壁はあまりにも高く、

厚く、何度もひるみそうになりました。しかし、産官学民各分野の実に多様な方々から、物心両面にわたり多大なるご支援・ご協力を賜りました。衷心より深く御礼申し上げます。

本書は東日本大震災における当法人の約1年間の支援活動を取りまとめたものですが、復興が緒に就いたばかりの被災地にあって、これは経過報告に過ぎません。今後も微力ながら支援活動を継続して参ります。

引き続きのご支援・ご協力をお願いいたします。

1年を迎えてー常務理事・浦野愛



2011年3月24日、私たちが宮城県宮城郡七ヶ浜町に初めて足を踏み入れてから1年余りが経ちました。日本財団ROADプロジェクトのご支援により、4月23日に「ボランティアきずな館」がオープンし、レスキューストックヤード（以下、RSY）ボランティアバスは49陣、834名（延べ2,624名）のボランティアが七ヶ浜を訪れました。日々の活動の中、ボランティアが全身で目の前のたった一人の言葉に耳を傾けようとする姿は、人生の基盤を失った方々にとって、再び笑顔や居場所を取り戻すための大切な拠りどころとなっていました。

初めて津波の現場に立った時、私たちの目の前に広がったのは、泥と潮の匂い、目を覆いたくなるほどの痛々しい家々、暗く疲れきった住民の顔でした。「80年間地道に積み上げてきたものが、一瞬にして無くなった」「海が憎い」「津波と一緒に流された方が楽だった」。避難所での足湯を通じて、様々な「つぶやき」と出会いま

した。そこには、1日に幾度となく襲う余震に

身を固くしながら、明日への不安や激しい喪失感に必死で耐え続ける姿がありました。

活動中、何度も「これでいいのか?」「もっとできることはないのか?」と自問自答を続ける日々でした。しかし、「名古屋から来てくれたの?そんなに遠くから!嬉しいねえ」「震災があったからあんたたちと会えたんだ。悪いことばっかじゃねえなあ」「名古屋で何かあったら、私たちが行くからね」という笑顔や温かい言葉に触れ、皆さんから『する』ことだけでなく『そばにいる』ことの大切さを教えて頂いた思いがしました。

今後は「一人ひとりの声を丁寧に聞く」「地元の力を信じ、地元のペースを尊重する」「住民とボランティアを繋ぐ」というキーワードを大切にしながら、応援して下さる皆さんと息の長い支援に取り組んでいきたいと思っております。引き続きご支援とご協力をよろしくお願い致します。



七ヶ浜町概要

七ヶ浜町は仙台市から 15km ほど北東に位置する半島状の町。人口は約 2 万 1000 人、面積約 13.3k m²。

名前の通り「7つの浜」に囲まれ、漁業や観光が盛ん。「菖蒲田浜^{しょうぶた}」は東北で最も古い海水浴場といわれ、家族連れをはじめサーフィンのメッカとして若者にも親しまれています。

昔ながらの漁師町のほか、仙台のベッドタウンとして新興住宅地も開発され、新旧の住民が入り交じった土地柄に。

スポーツ施設やホールが充実しており、外国人の避暑地だった歴史から造られた「国際村」では、地元の子どもたちを中心としたミュージカル劇団がつくられています。

震度 5 強の地震後、10m を超す大津波。菖蒲田浜など沿岸の集落に壊滅的な被害

死者・行方不明者 108 人

町内 5 カ所の避難所に一時 2000 人以上の町民が避難

応急仮設住宅は町内 7 カ所に建設、1,122 人が入居

*みなし仮設：民間住宅を国や自治体が借り上げて、仮設住宅の代わりとして被災者に提供したり、公営住宅や雇用促進住宅、被災者が自力で借りた賃貸住宅も仮設住宅とみなしたりした住宅を総称して「みなし仮設」とし、家賃などを国が負担している。

「みなし仮設*」には 198 世帯、675 人が入居（いずれも 6 月 11 日現在）



RSYの東日本大震災被災者支援活動年表

2011年

- 3/11 三陸沖を震源にM9の大地震、大津波発生
- 3/13~20 先遣隊としてスタッフ1人が被災地入り
- 3/17 名古屋・栄で街頭募金開始（その後も週一回のペースで継続）
- 3/20 全国社会福祉協議会の要請で名東倉庫から宮城向け資機材搬出
- 3/24~30 七ヶ浜支援活動第1陣としてスタッフとボランティア計7人が現地入り
- 3/25 震災つな×日本財団ROADプロジェクトスタート
- 3/28~4/2 第2陣計6人（現地で1人合流）が七ヶ浜で支援活動
- 3/30 東京で「東日本大震災支援全国ネットワーク（JCN）」設立総会
- 4/7~4/11 第3陣（運転手、マスコミ関係者含め17人）が七ヶ浜で支援活動
- 4/14 「東日本大震災被災者支援ボランティアセンターなごや」が名古屋市社協内に開設
- 4/23 七ヶ浜に滞在拠点「ボランティアきずな館」オープン
- 4/29~ 第4陣出発。以降、ボランティアバスを定期的に運行
- 5/6~5/10 名古屋で「うるうるパック」4,000セットを袋詰め、七ヶ浜の全小中学校などに配布
- 5/6 七ヶ浜で第1回仮設住宅入居者説明会「仮設住宅ってどんなところ？相談交流会」（以後、計6回開催）
- 5/14~5/15 七ヶ浜で表札プロジェクト「まごころ表札づくり」スタート
- 5/16 七ヶ浜国際村で「たべさいん」プロジェクト開催
- 6/4 RSY事務局で「集まれRSYボランティア！～みんなで一緒に考えよう！これからの支援～」開催
- 6/11 まごころ支援「輪っか和っかプロジェクト in 名古屋」スタート
- 6/13 愛知県被災者支援センター開設
- 6/30 七ヶ浜で「きずな喫茶オープンカフェ」開設
- 7/2、4~5 七ヶ浜で応急仮設住宅、在宅避難者・みなし仮設「せともの市&喫茶イベント」開催
- 7/3 七ヶ浜でつながる遊び庭・こどもアートしちがはま「音のワークショップ」開催（以後、月1回イベント）
- 7/30 七ヶ浜で「浜再生プロジェクト」ビーチクリーンスタート（9月10日まで毎週土日開催）
- 9/10 七ヶ浜で震災から1周年イベント「菖蒲田浜復興まつり」開催
- 9/24 名古屋テレビ塔周辺で「防災フェスタ2011」開催、東北物産販売や県外避難者の相談会など
- 10/8~9 愛知のモリコロパークでファンレイジングイベント「愛フェス」で「輪っか和っか」のブース出展
- 10/22~23 名古屋のオアシス21で「ワールドコラボフェスタ」で「輪っか和っか」のブース出展
- 10/23 七ヶ浜で在宅避難者・みなし仮設への支援「芋煮会」開催（以後、月1回イベントを開催）
- 10/27 ものづくり工房で紀宝町への応援グッズ「かえるちゃんタオル人形とメッセージキーホルダー」作成
- 11/12 七ヶ浜の地元漁師とともに「ポッケ汁まつり」開催
- 11/20・27 七ヶ浜仮設店舗・七の市商店街「ハッピードリーム看板を作ろう」開催
- 12/6 七ヶ浜で「きずな工房」オープン
- 12/11 七ヶ浜仮設店舗「七の市商店街」オープン
- 12/12~13、23~24 七ヶ浜で「うるうるお歳暮パック」配送

2012年

- 1/7~8 七ヶ浜で「寒中見舞いプロジェクト」でハガキをお届け
- 1/25 七ヶ浜きずな工房で「貝殻講座」開催
- 1/29 七ヶ浜仮設店舗七の市商店街「七の市」開催（以後、毎月最終週の日曜日開催）
- 3/11 七ヶ浜で「たべさいん&RSYボラバス大交流会」開催

※足湯は避難所・応急仮設住宅集会場にて実施。現在は週2日ペースで集会場で継続。



災害ボランティアセンターへの支援

R S Yの第1陣が七ヶ浜町に入り、真っ先にしたのは災害ボランティアセンターの支援です。資器材や物資を提供するとともに、まさに飲まず食わずで活動する社会福祉協議会の職員や、ボランティアに駆け付けた地元の中高生らのために炊き出しをしました。

炊き出しはヤマヤ物産の大型炊き出し器「まかないくん」を使い、あいち生協からいただいた食材を調理。「温かい汁物を食べるのは震災後初めて」などと喜ばれました。



社協職員やボランティアのために行った震災直後の炊き出し

足湯ボランティア



足湯はバケツ一杯のお湯で足を温め、手や腕をさすりながら一対一でゆっくりと会話を交わし、被災者の「つぶやき」を聞き取る活動。

がれき撤去などの力仕事にボランティアが集中する中、R S Yはあえて足湯による被災者の心身のケアを重視。七ヶ浜では年間で延べ約655名のボランティアにかかわってもらい、避難所や仮設住宅で計112回、延べ約1,541名の被災者に足湯を提供しました。

避難所での支援

公民館や小学校の体育館など当初、町内5カ所に設けられた避難所では、足湯ボランティアのほか布団や間仕切りの提供、仮設トイレへの洋式便座や手すり、階段の設置、下着や靴下の提供などを行いました。

また、愛知県安城市の農園や、噴火災害のあった宮崎県から野菜をいただき、地元の女性会に漬け物などをつくってもらう「たべさいんぷ

プロジェクト」も好評でした。

仮設住宅の建設が進むと、入居前の不安を少しでも取り除いてもらおうと、新潟県中越地震（田麦山）や能登半島地震（六水町）、新潟県中越地震（刈羽村）、岩手・宮城内陸地震（耕英地区）などを経験した方たちを招き、仮設入居に関する情報提供と、被災者同士の交流を図ってもらいました。

ボランティアきずな館の運営

ボランティア拠点「きずな館」は、まさに何もないところから築かれた施設です。初めはエアコンもありませんでしたが、「きずな喫茶」として開放した共有スペースには町民が寄って

ただけるようになり、ボランティアの生活環境も日々改善されていきました。

当初は1年間の予定でしたが、現地からの要望とご厚意で運営期間が延長されています。

七ヶ浜を支える

応急仮設住宅への支援

応急仮設住宅への入居が始まると、とじこもりがちになる独居高齢者らの個別訪問を重ねて



地元の中学生在がかかわった「表札プロジェクト」

困りごとを把握したり、集会所を利用してもらうよう声を掛けたりしました。

また、津波で流された家屋の材木を特別にいただき、加工した板で入居者の「表札」をつくって取り付けました。地元の中学生にデザインしてもらった表札は、「星」が輝いていたり、本物の貝殻がついていたりする素敵なものばかりでした。

殺風景だった集会所も飾り付けて居心地をよくし、カフェを運営して住民やボランティアの集いの場に。足腰の弱い要援護者宅には手すりをつけ、外出しやすくしました。

大規模半壊以上の被害を受け在宅で生活する方への支援

津波で自宅が流された後、近くの親戚の家やみなし仮設などに身を寄せた被災者は、応急仮設住宅の入居者と違って情報やモノが届かないという格差が生まれていました。これらの方々に対して月1回程度の集いの場づくりを通じて「震災後、初めて知り合いに会えた」という声も少なくありませんでした。

中央公民館の一室でボランティアが運営する「なごやC A F E」や、ボランティアがサンタの格好をしてもてなしたクリスマス会などのイベントを通じて、延べ800名以上が交流。

日本財団ROADプロジェクトの一環で布団を届ける「もっとHOTプロジェクト」や、月1回程度のお便りの送付なども続けています。



名古屋名物でおもてなしする「なごやC A F E」

親子支援

被災した子どもやその親がリラックスできる場をと始まったのが「子ども未来プロジェクト」。



元RSYスタッフの清野静香さんがかかわる「未来予想図実行委員会」や町子育て支援センターと連携し、月1回の「ひろがる・あそび庭・子どもアートしちがはま」を開催。音のワークショップやものづくりに子どもたちは大喜び。

LUSHジャパンのハンドマッサージにママたちもいやされています。子どもたちの笑顔が大人にも元気を与えています。

七ヶ浜を支える

浜再生の支援

海のまち・七ヶ浜にとって浜の再生は復興の象徴です。RSYはボランティアセンターによる浜の清掃や、サーファーらによる「ビーチクリーン」活動などに積極的にかかわっています。

震災半年の節目には菖蒲田浜での復興まつりに参加し、「日本最古の海水浴場」といわれる愛知・大野海岸の砂をまいて浜の再生を祈願しました。



震災半年後に行われたビーチクリーン活動

漁業支援

観光とともに七ヶ浜の産業を担ってきた漁業。しかし津波で港の施設は壊滅的な被害を受け、漁師も船や道具をなくして途方に暮れていました。

RSYとしては現状に復する復旧だけではなく、漁協が市民に開かれた存在として愛され、

震災前から存在する後継者不足や漁業への理解不足に対して提案していくなど、真の復興に向けての支援に挑みたいと、助成金を得てフォークリフト7台を提供したほか、「ポッケ汁」などの漁師料理を名古屋で紹介したり、浜の祭りを支援したりしています。

生きがい・仕事づくり

被災者の生きがいや仕事づくりの場として、七ヶ浜町社会福祉協議会との協力で2011年12月にオープンしたのが「きずな工房」です。

モノづくりの好きな町民十数名が集まり、小物やバッグ、木工製品などをつくっています。一部は名古屋でのイベントで販売し、好評をいただいています。

同時期にオープンした仮設店舗「七の市商店街」も全面的に応援し、月2回でいどのイベントで交流を図っています。



(上) 工房でモノづくりに励む町民

(下) 仮設店舗のオープニング



名古屋から支える

ボランティアバス

七ヶ浜町への支援が決まるとともに、名古屋事務局はボランティアバスの準備に取り掛かりました。2011年3月24日にスタッフを含む第1陣が発し、現地の拠点が整った5月の連休からは常に現地にボランティアが滞在するスケジュールを組み、マイクロバスや大型バスを手配し続けました。

現地での活動は時期を経るごとに変りましたが、一貫して大切にしてきたことは、名古屋のボランティアと七ヶ浜の住民との交流でした。その結果、2012年5月末までに49陣・834名（延べ2,624名）が名古屋から七ヶ浜を訪れ、そのうちの130名程度は2回目以上参加の「リピーター」です。

街頭募金



募金箱を手に街頭に立つボランティア

地震発生後すぐに街頭募金の呼びかけを開始し、初回の3月17日には50名を越えるボランティアが集まってくださいました。それから半年間はほぼ毎週土曜日、名古屋の繁華街・栄の街頭に立ち、2012年3月26日までの計33日間で、延べ697名のボランティアによって約250万円が集められました。募金集めだけでなく、募金がどのように活用されたかを伝える写真パネルもつくりました。

うるうるパック

全国のNPOや企業有志でつくるネットワーク組織「災害ボランティア活動支援プロジェクト会議（通称・支援P）」は、大災害が発生するたびに被災者が必要とする数種類の物資を被災地外で袋詰めする「うるうるパック」の提供を行ってきました。企業から無償で提供された支援物資を被災者のニーズに合わせパック化し、手渡しでお届けするプロジェクトです。

東日本大震災では、2011年5月に名古屋大学の一面をお借りして文房具などをパック化。愛知県を中心とした22企業・グループの関係者と一般ボランティアが2日間・延べ約250名参加しました。

12月には「お歳暮プロジェクト」として、七ヶ浜町と三重・紀宝町の応急仮設住宅やみなし

仮設にお住まいの方、愛知県に避難されている方々に「カタログ」から必要なセットを選んでいただき、約800件のご注文をいただきました。多数のボランティアの協力を得て、箱詰め・発送から現地へのお届けまでを行いました。



5月に名古屋大学で行ったパック化作業

寒中見舞いプロジェクト



心温まるメッセージが記されたハガキ

震災から半年が経った9月に七ヶ浜を訪れたボランティアが、年明けに向けて七ヶ浜の方々に「寒中見舞い」をお届けしようというプロジェクトを始めました。一般から公募したところ、予想の倍の2,000通を越えるハガキが集まり、1月にはボランティアが仮設住宅の集会場や小学校などで、七ヶ浜の方々に直接手渡ししました。みなし仮設などにお住まいの方へは郵送し、中にはお返事があって、新たなつながりが生まれたケースもあります。

輪っか和っかプロジェクト

震災後「現地には行けないけれど何か力になりたい」という人たちによって、広島・呉などで始まっていたメッセージ入りの「輪っか」をつなげて届けるプロジェクトに、名古屋からも参加しました。職場や家庭、サークルなどで集められた輪っかは約4,500個にもなり、七ヶ浜の仮設住宅の集会場やボランティアきずな館の壁に飾られています。



報告会・講習会の開催

この震災が起きて初めてボランティアに参加する人や、「足湯」のことを知りたいという人た



被災地NGO協働センターの吉椿雅道さんを招いて開催した足湯講習会

ちを対象に、名古屋事務局では「ボランティア説明会」や「足湯講習会」を開催し、事前の心構えなどを知ってもらいました。

活動が積み重なると名古屋での「交流会」を開き、七ヶ浜で活動した人と名古屋にいる人との出会いや情報交換、今後の支援を考えてもらう場としました。

七ヶ浜の現地スタッフが名古屋に戻るタイミングに合わせ、被災地の現状をお伝えする報告会も開催。県内で行われるさまざまなイベントにも積極的に出展し、現地の様子をお伝えして募金活動を行うと同時に、身の回りの備えなど防災の啓発活動にも取り組んできました。

東日本大震災支援全国ネットワーク（JCN）

メーリングリストが始まり

2011年3月14日、RSYをはじめ災害救援活動に携わった経験のある団体が、これまで積み重ねた実績を元に多方面と「ゆるやかに連携」することを目的に意見交換を行いました。

まず個々に電話やメールで飛び交っている情報を共有することが急がれ、現在のJCNメーリングリストの前身となる「higashinihon（東日本）」MLを開設。多くの支援組織から情報があり、参加者は毎日欠かさずこのMLに流れる情報を見ながらそれぞれに活動を進めていきました。

現地会議とガイドライン

「同じ地域で支援をしているにも関わらず、交流をする機会をなかなか見いだせずについて、そもそもどこの地域でどの団体が活動しているかが把握できない。」などの声を受け、2011年5月末から被災三県（岩手県・宮城県・福島県）でそれぞれ3回ずつ、「JCN現地会議」を開きました。支援者のみならず政府の現地対策本部や各県の担当局からの参加もあり、連携のきっかけをつくる方式となりました。

ボランティアに初めて参加する際の心構えからボランティアバス運行の注意点、心のケアや安全衛生などをまとめたガイドライン「災害ボ

した。

その後、一日も早く被災者向け・支援者向けの「メッセージ」を出すことが確認され、メッセージを発信する母体として「東日本大震災支援全国ネットワーク（Japan Civil Net: JCN）」という組織名が決定。3月30日に設立総会を開き、栗田が代表世話人の1人に就きました。

4月からは「震災ボランティア・NPOと各省庁との定例連絡会議」を6回実施。災害を受けた市民セクターと省庁とのコミュニケーションとして初の試みでした。

ランティア活動に初めて参加される方へ」をウェブサイトで配布。初めて参加する団体の大きな足掛かりとなり、各地で行われた事前研修などにも広く使われました。



第3回現地会議 in 岩手（2012/3/6）。企業の社会貢献担当者も多く参加し、企業と支援団体の協働などについて大きく話題となりました

広域避難者支援にも着手

広域避難者とそれにかかわる支援団体の課題は、被災地の課題同様に早くからJCNでも意識されており、早々から生活支援や保養プログラム活動など行っている活動団体等を把握してきました。

2011年9月にはJCNウェブサイト上に、「広域避難者の支援状況団体一覧」を公開。2012年3月には広域避難者支援に関する意見交換会を開催するとともに「広域避難者支援団体のネットワークづくりのための活動実態調査」を実施。全国の関係団体・機関にアンケートを送付し、結果のとりまとめを行っています。

2012年度も引き続き、被災地支援と同様に広域避難者支援の活動についても注力することとしています。広域避難者の支援団体の実態把握を進め、全国的なネットワークで結び、情報共有の「場」をつくっていきます。



JCNのホームページ

震つな×日本財団ROADプロジェクト

日本財団内に事務局

RSYが事務局を務める「震災がつなぐ全国ネットワーク（震つな）」と、2005年度から始まった新しいネットワーク「東海地震等に備えた災害ボランティアネットワーク委員会」とが母体となり、日本財団の支援を受けて震災直後に発足したのが「ROAD」プロジェクト。RSYからは事務局長の松田が派遣され、日本財団内に構えられた事務局で中心的な役割を担いました。

ROADは「Resilience will Overcome Any Disaster」の頭文字をとり、「『今出来ること』という一人ひとりの小さな道が一緒になって大

きな道へ どんな困難も乗り越える力」という意味が込められています。

「一人ひとりに寄り添う支援」、「ゆっくり丁寧な支援」、「現場に根差した支援」という方針を掲げ、足湯ボランティアの派遣と現場拠点での活動が柱に据えられました。



「週刊つぶやき」を発信

足湯ボランティアは、被災者に心身ともにリラックスしてもらうとともに、ひとり対ひとりの関係を避難所、仮設住宅のなかに作り出すことにより、被災者が本音や弱音を吐く場、住民の集まる居場所を作り出すボランティア活動です。

ROADプロジェクトは東京で足湯ボランティアを募集し、各団体が活動する拠点に向け派遣を行いました。1年間で延べ1,547名のボラ

ンティアが204か所の避難所や仮設住宅で足湯を提供。被災者の声を拾った「つぶやきカード」の総数は1万枚以上にのびました。

つぶやきはROAD事務局で集約し、テーマ別の課題に関するつぶやきを集め「週刊つぶやき」として内外に発信。ツイッターでも「足湯のつぶやきBOT」として被災地の声を広く周知したほか、東京大学被災地支援ネットの協力で、つぶやきの内容から被災地の課題を明らかにしていきました。

きずな館など3拠点整備

また、七ヶ浜の「きずな館」をはじめ、静岡県ボランティア協会と被災地NGO協働センターが運営する遠野まごころ寮（岩手県遠野市）、とちぎボランティアネットワークが運営するキャンプ八郎右衛門（岩手県一宮市）の3カ所の拠点を整備。日本財団が独ダイムラー社から寄贈を受けた車両のうち16台がROADプロジェクトの拠点に配備されました。

このような広い被災地から聞こえてくる課題と次なる支援策を共有するため、東京では仮設支援連絡会を計10回、東北の各地では若手の交流を兼ねた情報交換会を6回実施しています。

きずな館を含めた3拠点は2013年3月までの継続設置が決まり、各団体は今後も生きがいつくりや生活支援に軸足を移して活動を続けます。また、足湯ボランティアも「心を癒す足湯から場づくりの足湯」へと位置づけを変えながら、継続実施することが決まりました。つぶやきの分析と活用も、専門家の協力を請いながら、量ともに深めていく予定です。



愛知県被災者支援センター

交流会には延べ 1,000 名

愛知県被災者支援センターは県に避難されてきた方々と県民や企業などを結ぶ架け橋となることを目指して、2011年6月に県庁内に設置されました。11年度の運営はRSYを含めたNPOの4団体が行いました。

交流会は28回開催し、延べ1,004名が参加されました。毎回50名ほどの参加者があり、多くは若いお母さん。常連さんも多くなり、12年に入ってから福島の方々が自主的に交流会を開く動きも出てきました。会には弁護士や税理

士などの専門家が出張して来てくださり、原発に関する相談も受け付けています。



一通の手紙から…

約1,300人の登録者には月2回、定期便「あおぞら通信」を送っています。愛知県の支援やイベント情報、被災地の支援情報や新聞の切り抜きなどを、それぞれの被災者の地域ごとに丁寧に分けて発送しています。

こうした作業には多くのボランティアがかかわり、避難者ご自身や、被災地域の出身者などの参加も増えました。

11月に2児の母親である29歳の避難者の方からの手紙がセンターに届きました。知り合いがおらず、寂しくてたまらないことや、原発に関する不安などが書かれており、この手紙を「あおぞら」に掲載すると、他の避難者から26通の

手紙が新たに届きました。そのうち10通は65歳以上の方で、親戚宅などに避難し、身軽に動けない人たちが多くいらっしゃる事が浮き彫りになりました。

これらの手紙を冊子として配布することも予定しています。



「パーソナル支援」も模索

避難されている方の相談に細かく対応できるようにと、「パーソナルサポート支援チーム会議」を定期的で開催。弁護士会や司法書士会、社会福祉協議会が相談会に参加し、支援する側の勉強会の場としました。

センターは12年度も継続することが決まり、RSYも引き続きかかわっています。

生活物資の問題についてはだいぶ落ち着き、

今後は愛知での生活支援や心のケア、生きがいづくり、就労などの支援が必要とされます。趣味や得意分野を生かすようお手伝いしていきます。

各市町ではまだまだ登録をしておられない避難者もいると思われます。いつか故郷に帰るためにも、愛知県での生活の向上や賠償請求などのためにも、ぜひセンターに登録して、交流会に来ていただきたいものです。

東日本大震災被災者支援ボランティアセンターなごや

ボラネットの協力で運営

東日本大震災被災者支援ボランティアセンターなごやは2011年4月11日、名古屋市が市総合社会福祉会館5階「福祉のひろば」に設置。名古屋市社会福祉協議会が運営主体となり、RSYや各区の災害ボランティアネットワークで構成するなごや防災ボラネットが運営協力する形でスタートしました。

センターの機能は2つあります。一つは市内にお住まいの被災者の生活支援に関するニーズの把握とボランティアによる支援、もう一つは被災地域におけるボランティア活動を希望する

方に対する相談や情報提供。

開設から2012年3月末までに、235日で延べ1,143名のスタッフが運営に当たり、以下のような実績を残しました。



マスコミのカメラに囲まれての開設初日

■ 相談実績

被災者からの相談	831件	内訳 [ニーズ受付] 482件 [情報提供] 349件
ボランティア活動希望 (個人)	730件	内訳 [登録] 368件 [情報提供] 362件
ボランティア活動希望 (団体)	143件	内訳 [登録] 47件 [情報提供] 96件
物資提供希望	353件	
その他	96件	
(相談件数) 合計	2,153件	内訳 [来所] 537件 [訪問] 135件 [電話] 1,481件

＜主な物資提供元＞
レスキューストック
ヤード/名古屋名東
ロータリークラブ/
愛知県被災者支援セ
ンター/中京アドサ
イン/想念寺/愛知
教会/東亜合成/ジ
ュバンス/セカンド
ハーベスト/ちいさ
なちから/大杉荘

■ ボランティア活動実績

市内での ボランティア活動実績	活動件数 456件 (延べ活動者数 500名) 交流会協力 8回 (延べ活動人数 143名)
被災地での ボランティア活動実績	活動件数 129件 ※センターメールマガジン等を見て ボランティアバスに参加した件数等

被災者ニーズと今後の展開

県外避難されてきた方にとって、まず最初に住まいを確保することが必要となります。住宅ニーズについては公営住宅の無償提供などにより解決を図ることができてきましたが、住宅入居後には、日常生活を営むための家財や生活用品が不足するという状況が生じました。これら物資ニーズに対して、市民や企業などから提供いただく物資をマッチングし、ボラネットメンバーやセンター登録ボランティアの方々の協力

のもとお届けしてきました。

震災から1年、センターでは物資ニーズに関する調整、対応に精力的に取り組んできました。しかし、話し相手や交流の場を求めるといったソフトニーズも顕在化してきているため、今後はボラネットやセンター登録ボランティアに加えて、被災者の近隣住民の方々、そして区社協とも十分に連携し、被災者一人ひとりに継続的に寄り添っていくことを目指していきたいと考えています。

東北の復興のため ともに歩んでくださいませんか

会員募集、ボランティア募集、活動支援金の募金など、
詳しいことはお気軽に事務局まで

郵便振替

口座番号 00800-3-126026

加入者 特定非営利活動法人レスキューストックヤード

銀行口座

三菱東京UFJ銀行 本山出張所

普通 3505681

口座名義 特定非営利活動法人レスキューストックヤード

ボランティアきずな館

〒985-0802 宮城県宮城郡七ヶ浜町吉田浜字野山 5-9

屋内ゲートボール場パーク七ヶ浜内

<http://rsy-nagoya.com/>

ご寄付はウェブサイトからも受け付けております



特定非営利活動法人レスキューストックヤード
**東日本大震災
被災者支援活動報告**

2012年6月23日発行

特定非営利活動法人レスキューストックヤード
〒461-0001 名古屋市東区泉 1-13-34 名建協 2階

tel 052-253-7550

fax 052-253-7552

e-mail info@rsy-nagoya.com

web <http://rsy-nagoya.com/>

twitter rescuestockyard

facebook rsy.nagoya